

月 報 No.76

神戸山岳会

発行日 49.11.27
 発行 神戸山岳会
 神戸市生田区中山手通1丁目
 105の9 前田方
 編集 立 岡 佐 智 央

例・集会スケジュール

11/10	雪彦山 R.C.T	前夜・現地	宮 本
11/13	集 会	於・研修所	19:00
11/17	ボツカ(天狗岩南尾根〜極楽茶屋〜小川谷 〜有馬)	阪急御影	8:30' 立 岡
11/24	六甲合同登山(杣谷〜山寺尾根〜小川谷〜 摩耶山)注:“例会のお知らせ”のハガキ で23日集合とあるのは間違いです。	護国神社	8:30' 岸 本
12/1	不動岩 R.C.T(冬山個人装備持参)	国鉄宝塚・前夜	20:00' 内藤 2
12/4	委 員 会	於・研修所	19:00'
12/8	ボツカ(宝塚〜芦屋・アイゼン T.)	阪急宝塚	8:00' 三 浦
12/11	集 会	於・研修所	19:00'
12/15	強 歩(帝釈〜丹生山)	箕 谷	8:30' 宮 本
12/22	冬山合宿準備会及び食糧買い出し		
12/30〜1/5	冬山合宿 木曾駒ヶ岳〜空木岳		
'75			
1/12	装備返還及び反省会	於・研修所	12:00'
	新 年 会	”	15:00'〜
冬山合宿研究会			
11/19(火)	装 備 関 係	三宮・カンヌ3F	19:00
11/26(火)	食 糧 関 係	”	”
12/11(水)	ルート研究及び気象	研 修 所	”
12/17(火)	総 合	三宮・カンヌ3F	”

目 次

	頁
冬山合宿計画の概要	3
夏 山 合 宿 (星 野 辰 也)	4
夏山合宿におもひ (内 藤 正 司)	5
源次郎尾根平蔵谷側一峰フェース (三 浦 靖 男)	6
夏山合宿一感想 (幸 内 義 孝)	7
夏山合宿を終えて (田 中 正 裕)	9
夏 山 合 宿 (河 田 久 雄)	9
食糧・医療係としての反省と感想 (萩 本 維 都 子)	11
朝日岳～白馬岳～鎚温泉 (土 居 健 次)	12
例会報告一大杣池集中 (田 中 正 裕)	15
烏 甲 山 (2037.6m) (三 浦 靖 男)	15
木曾駒ヶ岳滑川集中 (内 藤 正 司)	17
前 岳 沢 (長 島 安 代)	18
本 岳 沢 (幸 内 義 孝)	19
冬山偵察・木曾駒ヶ岳～宝剣岳～空木岳 (田 中 正 裕)	19
初めての山行 (片 山 文 子)	22
会 員 動 静	23
編 集 後 記	23

冬山合宿計画の概要

登山地	中央アルプス・木曽駒ヶ岳・空木岳		
目的	積雪期登山の基礎技術習得及び積雪期登攀（中堅会員）		
期間	昭和49年12月30日～昭和50年1月6日		
日程	A 班	12/30	大 阪 発
		31	上松～上松道八合目
		1/1	八合目～木曽駒ヶ岳～宮田小屋
		2	宮田小屋～檜尾岳
		3	檜尾岳～空木岳
		4	池山尾根下山
		5・6	予 定 日
	B 班	12/30	大 阪 発
		31	上松～木曽駒ヶ岳西面の登攀（詳細未定）
		1	”
		2	宝剣岳稜線にて A 班 に 合 流
C . L	内 藤	正 司	
S . L	立 岡	佐智央	
S . L	三 浦	靖 男	
食 糧	古 賀	・ 星 野	・ 長 島 ・ 片 山
装 備	三 浦	・ 田 中	・ 幸 内 ・ 河 田
気 象	星 野	・ 長 島	
医 療	幸 内		
渉 外	三 浦		
参加者	内藤（正）・立岡・三浦・古賀・星野・長島・片山・田中・幸内・河田・岸本		
（内定）	野上（芳）・野上（博）・新川・武田・梅原・乾・金田・数野 以上19名		

※ 計画遂行上、11月末日迄に参加・不参加の確答をお願いします。

夏山合宿

星 野 辰 也

7月の集会で、今回の夏山合宿は針ノ木峠－立山－剣岳であるとの発表があった。僕と剣岳との初対面は、昨年後立山縦走を行った時である。その時の印象は、今でも強く心に残っている。天に向ってそそり立つ峰は、槍ヶ岳のそれより重厚で穂高のそれより峻烈である。いまその剣岳に、この山をホームグラウンドにしている神戸山岳会の一員として、登頂できるなんてまるで夢のようである。

8月13日 21時50分 期待と不安のうちに大阪を後にし、針ノ木大雪溪へと向う。今日から3日間、針ノ木～平ノ渡～五色ヶ原～立山～剣沢への縦走が始まる。長い雪溪を夜行の疲れもなんのそのと一步一步登り、とうとう針ノ木峠に着く。さっそく針ノ木岳に登るもガスの為、期待していた剣の雄姿はみえず残念！ 頂上は2,800メートルの山とは思えぬのどかさについてたて寝すること10分余り。さっそく峠に引き帰り、今宵のねぐらを求めて一路針ノ木谷を下る。

針ノ木谷での晚餐といい、五色での晚餐といい、毎日千メートル以上の登高を忘れさせる楽しいものであった。初めにこのルートを聞かされた時、正直云って妙なルートを取るなあと思いましたが、五色より針ノ木岳を眺めながら地図を見つつ、よくぞ歩いてきたものだと思います、また一味違うこのルートの良さがだんだん解ってきたような気がします。

16日の五色～剣沢の縦走は、雄山での人だかりに圧倒され、他の印象はあまり強く残っていません。8月17日 心配していた台風14・15号もどこへ行ったのか、天気の方も入山以来一応晴6時30分発。剣沢を後にKさん曰く、これが昔のルートだと云う夏草の生い茂る道を下降し、やがて雪溪に出る。この後、八峰・平蔵の下降があることなどつい忘れそうになる程気楽な下降である。昨日と変り、背中にあるのは数Kgの行動食と若干の装備のみで、O・Bの話を聞きながらしばらく行くと平蔵雪溪出合に着く。一服する間に雪溪を偵察(?)する。みると両側を絶壁にはさまれ、雪がびっしりと谷を埋めている。はたして下れるのかなと思ひ、いままでの気楽な気分もどこへやら……。さらに剣沢を下り、長次郎雪溪出合に着く。7時20分いよいよこれから千メートル余りの登行が始まる。5・6の科尔取付8時40分。六峰のA～Bフエースに多くの登攀者が取付いている。O・Bの方々が色々ルートを説明してくれ、今度来る時はAだろうがBだろうが登ってやろうと思うも何よりも、これからの八峰上半の方が気になる。六峰からチンネの頭、本峰とすばらしい登攀であった。特にチンネは岩の殿堂といった感じで、実にすばらしい。よくもこんな所を登るものだと感心せずにはいられませんでした。

本峰着12時50分。本峰はゴミの山でいささか残念でした。N.M両氏を15分ほど待ったが現われないので、平蔵コルへと下降する。平蔵雪溪だ！ いよいよこれを下降する。雲がだんだん低くなってきて、今にも降り出しそうでいやな予感がする。誰もザイルを出せという声がない。あにはからんや、どこかでグリセードで下れなどという声がする。みると上部はかなり急傾斜で下の方には石がゴロゴロしている。南無阿彌陀仏、必死に下ること2時間。前半の恐怖心とはうらはらに、後半は大分慣れて実に楽しいグリセードとなった。それでも新人全員平蔵雪溪出合に着いたころには、実にさんさんたる形相を呈していた。すばらしい思いを心に剣沢B.Cへの足取りは軽い。バラバラ降り出した雨もKACのコンパに圧倒されたかのように上がり、剣沢に歌声がこだまする。ブラボーK.A.C

8月18日 予定を変更して雷鳥沢より室堂経由で帰神する。

装 備 係 と し て

7月の集会で装備係を命ぜられたが、一体何をどの程度準備すればよいのかサツバリ解らず、あれこれ山の本などで調べてみた。個人装備は先輩のアドバイスもあり、まあまあ解るが共同装備特に石油の量などサツバリ見当もつかず、個々の品目の重量など白紙の状態でした。その為、M君に全面的に依存することになってしまいました。また入山中にスベアー一台が不調になったのと、ベニヤ板が手配できなかった事は反省する余地があったと思います。これから冬山・春山と各季節における装備の勉強の必要性を痛感しました。



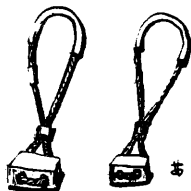
夏山合宿におもう

内 藤 正 司

計画の段階で、今回は新人諸君を対象としたコースをと考え決定した。針ノ木峠を越えて、五色ヶ原を経て剣岳。いかにハイキングコースかのように考えられるコースもやはり3,000 m近い山々を登ったり、下ったりする変化のある楽しく又、苦しいものだ。夏山で魅力のある雪溪・お花畑・草原・満天の星・冷たい水・岩壁などをすべて味わったと思う。

私は一つの目標として、新人諸君との交流と何事も積極的に行動してもらい、余り口出しをせず見守っていた。初めての合宿で、不安と期待とがあったと思うが、よくお互いに助け合って行動

面もスムーズに行なえたと思う。全般的に、もっと家で山の本や技術書を読み、予習しておく必要がある。夏山は体力を養うトレーニングと考える事も大切だ。楽しく味のある山行をする為には体力と憧れを持ち、日頃のトレーニングを一生懸命やれば成果が上がると思う。第2日目ぐらいから合宿前のトレーニングの成果が現われてきた。いかにトレーニングの必要性があるか、身をもって判っただろう。神戸山岳会はよく歩き、よく登り、よく滑りオールマイテアーのアルピニストを多く求める会なのだ。実践あつてのアルピニスト、そして自分自身との戦いでもあるそんな「ひと味がう」山岳会を目標にしている。これからは、冬山に向ってもっと厳しいトレーニングを積み、憧れへ向ってほしい。



源次郎尾根平蔵谷側一峰フェース

三浦靖男

L・内藤(正)、三浦

昭和49年8月17日

山の朝は早く、しかもあわただしい。そんな中でふと自分を見つめる時、あの垂直の壁において一本のハーケンに身を託す時に思ふような張り詰めた気持ちを思い起こさせる。今日一日を充実して過ごす、大自然と人間との語らいにひとときの詩情を思い、岩場の可憐な花に心を落ち着ける。そんな気持ちで剣沢のテント場を後に、平蔵谷雪溪へ向かう。

20分ぐらいで出合に着き、ここより傾斜のきつい雪溪をピツケルだけで行く。10分も登ったであろうか、一峰フェース下部ルンゼに思わしき大きなルンゼに取りつく。氷を削り岩への暖かな感触に気を和ませて行く、すぐにその大きなルンゼと中央ルンゼでないことに気付き、さらに傾斜のきつくなった雪溪を登り正規のルンゼに取付く。7時30分。耳に入る音は向かい側の雪溪より落ちる水の音だけ、そして大気の冷たさ。

F1を30mで簡単に過ぎ、F2もなんとなく過ぎる。F3はやや左よりの壁を微妙なバランスで登り、F4チヨツクストーン状の滝をチムニー式に強引に越える。ここから河原状になり、F5・F6と続く。セカンドをビレーするころより剣沢のテント場が目に入り、などやかな赤や黄色のテントに心がなごむ。F7チヨツクストーン状を越え、F8も簡単に越える。ここよりブツシュを漕ぐこと半時間、下部・上部を二分する中央ルンゼに出る。ここからの上部岩壁は、圧倒的なスケールで

聳え立っており、何物をも拒む巨人のように・・・。

空の青さと壁の白と、そこに点在するクライマーの鮮かな赤、いやがうえにも私の登高欲は高まる。1 P、凹角状の壁を40 m いっぱいでカンテに回りこんでビレー。2 P、そのままフェースをブツシュまで15 m のばす。3 P、さらに凹角にカンテとのばしてテラスに出る。4 P、ここより核心部に入る、フェースを10 m ほど直上左に5 m トラバースさらに10 m 直上し、左に5 m トラバースここでトップはアブミビレー。5 P、そのままそう、保塁の城をそのままもってきたような小さなホールドにスタンス、そして下には200 m ほどスツバリと中央ルンゼめがけて切れ落ちている。ビレー点より5 m ほど左に行き、そのままカンテを左に回り込み、さらに左上めがけて行く。そしてたまに顔を会わすハーケンに身を託して、5 m 直上ブツシュテラスに出る。ここで事実上の登攀は終了。10時30分、ここよりハイマツを漕ぐこと2 P、源次郎尾根一峰頂上に立つ。

11時20分。

我々は登攀所要時間4時間というすばらしい時間で、この一級の壁に行くことが出来た。

暖かな陽を背に受けて、どこまでも澄んだ青空、空間にひとときを過ごす青春の一ページを託す白い岩膚に引掛る自分の指先・つま先に、そして心地良い汗が私の心を大自然の中に連れて行ってくれる。そんなすばらしい印象に残るこの壁に頬擦りさえして、二人今この時を思う。

頂上で休み、きつい稜線を剣主峰目指して行く、この自然の造り出したすばらしいモチーフにふと心がなごむ。二峰を過ぎ懸垂にて主峰のゴルに降り立つ、ここより歩くこと1時間。1時過ぎ剣岳に着く。そこには今まで抱いていた自然の強さではなく、人間に毒された弱い自然の断片が目に入るだけであった。

頂上よりあとはのんびりとツーリストのような気軽さで歩く、大自然の中に強く生きる花を見ては感動し、そして今日の自分の一ページを見ながら雨も加わっての楽しい下山となる。心地良い疲労感と征服感に浸りながらテント場に戻る。そこには今まさに青春の一ページを綴った若き自然人が心暖かくむかえてくれた……。

夏山合宿一感想

幸内義孝

合宿の一ヶ月前の例会の時、内藤さんの兄さんから「もうそろそろランニングしとるかな」と言われ

た。その時から朝晩少しだが、トレーニングを行った。急に始めたのが悪かったのか、合宿一週間前から体の調子が悪くなり、合宿には行けないのではと思ったが18日にはほとんど良くなり、大阪駅に行くことが出来ました。何しろアルプスは初めてだったので、期待に燃えつつ恐い感じでした。列車の中では寝ようと思いつつも仲々眠れなかったし、何となく不安だった。扇沢に着いた時扇沢ってこんなところかと思った。最初、腹がへってすごく汗が出てしんどかった。もう帰りたいような気持ちでした。でも途中雪溪に入ったら滑りそうでいい気持ちのような恐いような、変な感じだった。雪溪からゆっくり歩いてくれたので何とかもった。針木岳は2,800mで、今まで2,500mが最高だったのを越したので、大変いい感じだった。下に黒部湖、向いに立山美しかった。眠むかった。下りは足の潤滑油が切れた。次の日は五色ケ原、山の頂があんな平らとは!? ハイマツ、そして草花、何となく春の気分、雪解け水の冷めたさ、別世界へ来たような感じだった。夢に見た3,000mでもあまり気分よくなかった。途中の蛙がよかった。一番歩きのルート・ファインディングは難しいと思う。僕なんか、下ばかり見て歩いているので、前の人と離れるとどちらへ行ってよいかわからなくなることがしばしばです。

そして剣岳、剣岳を初めて見てウワァー一言に尽きる。剣沢雪溪は大変気持ちよく歩けた。でも立山から剣御前小屋迄のように早く歩いたらとくにダウンだったと思う。本当の所、萩本さんがいてくれなかったら、とくに伸びていた。男ばかりならもっとペースが速かったろうにと思った。剣岳に登る時、田中さんがCフエースとチンネに登りたいといった。でも僕は、そんな気持ちは起らなかった。登っている人を見て、よくやるなあと思っただけだった。熊の岩の所でA・B・C・Dフエースの説明をしてくださったが、何となくボーと岩山に圧倒されていた。八ツ峰5・6のコルの所で右を見てワァー、下を見てゾーとして皆からずっと遅れたが、最後尾に岸本さんがついてくれたので恐いながら落ち着けたのが嬉しい。変な所を8・4ヶ所通ったが、やはり最初が一番こわい。皆スースー、僕ボチボチ。O・Bの方々がよく教えて下さったので、剣岳へ無事に行けた。ひとりじゃとても無理。平蔵谷ではグリセードの練習、なんせ初めが一番恐いがそれが済むと大変おもしろかった。梅原さん達は大変じょうずで、気持ちよさそう。それからアイゼンに替えた。いつも僕が最後、一番とろいのだ。歩き出したと思ったらヒモに引っかけて前へバタン、一番ドジだ。でも無事剣沢テント場へ辿りつく。

テントの中でも皆、良い人ばかりでとてもなごやかだった。でも僕は新人で最初だから、皆親切だったのだろう。一年たったら厳しいだろう。(宮本さんがいつもこぼしていた。)

夏山合宿は、生まれて初めてのことで、感激につぐ感激で言葉では言い表わせません。大変よかった。これからもなるべく多くの例会に参加したいと思っています。でもやっぱり岩は恐い。

天候も大変よかったので、神様にもありがとう。

夏山合宿を終えて

田中正裕

天候に恵まれ、快適な合宿でした。針ノ木岳からのスバリ岳、黒部への展望、険しさの中の草原といった五色ヶ原、かの有名な立山、そして岩峰のかたまりを空に突き立って、岩と岩の間には雪を抱いている。岩と雪の代名詞、剣岳を初めて見てスケールの大きさに驚きと感動を覚えました。

個人では行くことのできない八峰上半の縦走、平蔵雪溪の下り等をなんの不安もなく山行出来たことは、O・B並びに先輩の方々のお陰です。コースの選定もバリエーションに富んでいて、山への視野が一步広がった気がします。

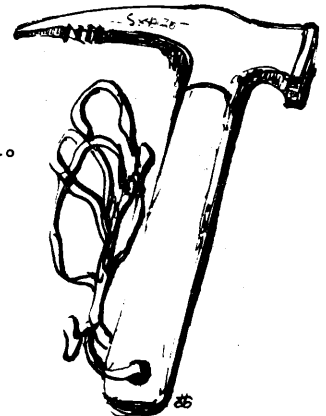
自己の反省となると、いつも自分ではどういふ所が悪かったのか判り難いところですが、確かに言えることは、自分にはエゴがあったと思います。自分を少しでも楽くに、そしてスキを見ては手を抜く、といった事を知らず知らず行ってしまう。意識せずにものごとを進んでやっていけるようになりたいと思います。

食料係として

担当に関係なく、食事の支度を手伝って下さいまして有難うございました。

- 。 コツフェル及び食器類の管理が悪かった。
- 。 ラジウスの点火に手こずった。

(以上が気がついた点です。)



夏山合宿

河田久雄

8/13 21時50分、大阪発の「くろよん」は私の期待と不安をいっぱい載せて、信濃大町

へ……。

8/14 6時大町着、駅よりタクシー2台に分乗して扇沢まで、朝の冷気が眠気をふっ飛ばしてくれる。6時30分、扇沢で朝食、さあこれから山へ入るのだ。針ノ木谷に入って1時間半程でもう雪溪になる。峠までは急なジグザグ道だ。あせらず一歩一歩着実に登るのだ。雪溪の水が喉を潤してくれる。針ノ木峠着14時10分。ザックを置いて針ノ木岳に登る。眼下に黒部湖・ダムの手端も少し見える。そして、前面には立山連峰、今日の疲れがすっとんでしまう光景だ。針ノ木谷を下って今日の露营地に向かう。谷の石ころを整地してテントを張る。10時 シュラフにもぐる。明日の事を考える間もなく寝入ってしまう。

8/15 4時30分起床。6時30分、今日の目的地、五色ヶ原へ向かって出発。黒部湖を渡って平の小屋着11時、13時15分刈安峠着。汗ばんだ体に時々吹きつける山の冷たい風がひじょうに心地良い。さらに30分歩いて10分の休憩もありがたい。16時五色ヶ原着。19時30分就床。

8/16 4時30分、山の冷気で目が覚める。今日の行程は剣沢までだ。6時40分出発。7時15分ザラ峠着、ここより少し登った所でブロッケンを見る。8時50分獅子岳着、12時15分雄山頂上。この雄山の登りでは、他の登山者達にことごとくペースを乱された。雄山よりあとは、上り下りのあまり激しくない道なので、ペースを少し上げる。14時、下に剣沢のテント場が見える。前面には剣岳が見え隠れする。テント場まで一気に下る。まだ3時なのにテントでいっばいだ。19時30分就床。この時ばかりはむしろ熱いのとイビキで寝つかれなかった。

8/17 4時30分起床。今日は剣岳に登れるのだ。6時30分出発、身が軽くなったのとうれしい期待とで、足が自然と速くなる。長次郎雪溪の胸を突き上げる様な傾斜、そして上部に聳える岩壁、岩壁、岩壁……。ものすごい。八ツ峰5・6のコル着9時15分。途中あの名高い剣岳チンネの上部に立つ。クライマー達でどった返している。12時45分本峰着。下りは平蔵谷の雪溪をグリーセードで下る。下部ではアイゼンを着けて下る。下山中16時頃雨が降り出す。16時30分テント場着。紅茶で体を暖める。今日はコンパの日である。6人用のテントが13人で張れあがる。雨に濡れて冷たいが、大声を出したおかげで服も乾いてしまった。22時就寝。

8/18 5時30分起床。7時15分出発。室堂着10時、富山発13時55分「雷鳥6号」で帰神。

後記、私にとって初めてと云える本格的な山行を終えて、ある種の安堵感とその反対の未熟感とでいっばいです。

食糧・医療係としての反省と感想

萩 本 維都子

食糧係は今回は宮本さん・田中さん・それに私の三人で行ないました。世代も性別もちがいが、それゆえ好みも違う三人のユニークさが出せていましたら、うれしく思います。

それぞれが今までの経験から得た最も良い意見を出し合った事は、食糧計画をたてるにあたり、色々と学ぶ点が多く良い経験になりました。計画の段階ではいつもこれで行ける、これなら文句は出ないだろうと、最善をつくして献立を考えるのですが、いざ実施となると色々困難な事に出くわします。その時のメンバーのコンディション、明日の行動の程度、又不調をうったえるメンバーが出た時などは、さらに食事を考えなくてはなりません。それに毎日の過激な運動量を補うだけのエネルギーを摂取するのも大切です。朝食と夕食はもちろんですが、行動中の食糧も大切なものです。特に今回は行動食のむずかしさを知りました。水や火を加えないで食べれる事(パン・ビスケットの類)、食べやすい事(かまぼこ)、カロリーが高い事(チーズ・サラミ・ソーセージ等)、フレッシュである事(レモン・キュウリ)、これは又気分転換にもなる。そしてタイムリーである事、これが一番重要であることを知りました。長い道中のつれづれに、こういった食糧がバテるのをふせぎ、精気を取りもどさせる第二の手段だと思います。第一はもちろん澄んだ空気と青い空と、すばらしい景色だと信じています。

今回の反省としましては、第一に忘れものが多かった事、自他共に深く反省しています。第二にスベアの空だきがめだった事、第三に行動食が少なかった事です。夏合宿は初めてですが、私は女ばかりのワングルで育ったものですから、男の人の好み、どの位食べるのか、又それぞれの会の方針等、目新しい事が多く参考になりました。これからの合宿で何か一つでも役立てたいと思っています。

医療係としましては、今回の合宿において重病人やけが人が一人も出なくて、小さな指先の切り傷、ちょっとした食欲不振・疲労等の軽症に終った事が何よりもうれしいです。冬山合宿と今回の合宿で学んだことは、衰弱した体には薬の速効性は望めないだろうと言うことです。日頃からトレーニングを積み、体力をつけ、不節制をやめ内臓を強くしておくことが、山でバテないために最も大切な事だと思います。山での疲労が最初に来るのはたいてい胃腸です。これがやられるといくら頑張ってもファイトが湧きません。何ものも受けつけなくなった胃に働いてもらうために、非常用として、カロリーが高くて胃に負担がかからない流動食品が必要となります。くず湯・おもゆ・スープ・ココア・練乳・オオスポーツ等の携帯も食料係と同じく考慮すべきだと思います。薬は最後

の切り札です。しかし、山においてはきやすめにすぎないと思っています。そうは言っても薬はなくてはならないものです。精神的依存も大きな効力だからです。次回の合宿にもやはり内用・外用全てそろえてバツキングして出発するだろうと思います。



朝日岳～白馬岳～鎚温泉

S. 49. 7. 29～8. 1

土居 健次

夏山シーズンがやってきた。しばらく山から遠のいていたので、今回は是非山を歩きたいと思っていた。さいわい会社の夏休みが1週間とれた。さて、そうなるのとこの山にするかと考える前に頭に浮んだのが、朝日～雪倉のコースを思っていたのである。なんせ、盆休みがとれないので八月上旬に登ることにして、さっそく仲間2～3人に声をかける、それも出発の4～5日前につけたため、みんな予定がつかず結局小生1人旅になってしまった。私は仕事上、土・日曜日に出勤することがたまにあり、そのたまたまの日曜日が休みであっても家庭的用事がなにかとあり、結局例会に参加できなかったりしている。トレーニング不足を多少とも気にしながら、私は1人神戸を出発、大糸線・平岩駅に着いたのが午後9時半、当初旅館に泊まる気もなく、駅で寝るつもりが、駅員に追出されたので、川のはたにあった車庫で、一夜を明かした。翌朝1番のバスで蓮華温泉に向う。夏のさわやかな朝だった。車窓から焼山の噴煙が見えた。その時まで焼山がつい先日爆発したとは知らなかった。今年の夏山は例年になく残雪が多いらしく、朝日～雪倉の斜面に残雪が大きく見られた。バスの終点から温泉まで歩いて15分。コの字形の長屋的小屋とフロ場の小屋があるだけの山小屋温泉といったところ。朝日～雪倉のコースを選んだ1つの理由は、登山者が他の山に比べて少ないであろうと思ったが、案外そうでもなかったのには少々がっかりであった。蓮華温泉でゆっくり仕事の疲れやその他もろもろのものを癒やすのも今回の1つの理由であった。しかし、いざやってきてみると、心は早や山の上でありとても朝から温泉などに入っている気がせず、出発することにした。樹林帯の中にある道を稜線をトラバースするように、雪倉岳が左手になるかっこうで進む。兵馬平を巡回して新しい急傾斜を登り、再び瀬戸川への急斜面を下ると、川には1本のワイヤーにぶらさがっている移動台車があった。1人で動かし難く、対岸よりロープで引張らないとたどりつけないようなしろももであった。白高地沢には、渡るべく丸木橋もなく、渡渉を強い

れた。その時の水の冷たさが、骨のついでまで感じられた。渡り終えたところで昼食をとる。空腹の割には食欲がなく、水で流しこむことにする。さあ朝日岳への、たんたんとした五輪尾根が続く。登るにつれて足の疲労を感じる。やはり年令の精だろうか、とは言うものの、他の年若いパーティを追抜いていく自分にねばりを押しつけて、ペースを乱さずに登った。10分間の小休止に手足を大きく伸ばして草の上に横たえ、目をつぶると山にいる満足にひたることができる。歩き始めの苦痛にじっとこらえ、1歩1歩登る自分は心にありし日の郷愁の思いに、また空白な時間の流れにいつしか調子を取り戻し、登り続けるのであった。風がでて雲が空を被りと、雨がぼつぼつ降り出す。再び止むが、雲は去らない。朝日岳の頂下に2〜3のテントがすでに張っており、私もつり天幕を張ってしばし横になっていると、朝日岳の小舎から従業員が来て「ここはテント場ではないので、すぐ撤収して朝日小舎の前にある指定されたテント場に行くように」と忠告を受けた。リュックを開きテントの中で、さあこれから食事を作ると言う時に言われたので、非常に腹が立った。とにかく夕食のカレーライスを食べてから移動することにして、さっそく準備にとりかかる。

天候はうっとりしくなり、時々雨が降り出す。朝日の山頂まで10分程。速く白馬岳が夕焼の中でひととき印象的に目に入る。雨が再び降り出す。雨具を取りだそうか思案しながら、ついださずに雨の中を朝日小舎めがけて急ぐ。小舎にたどりつく頃から本降りになり、激しい雨の中天幕を張った。

昨夜は周囲のテントからの話声になかなか寝つかれず、翌朝は午前8時過ぎから騒々しくなり、目をさまし再び寝ることにしたが、なかなか寝むれず寝返りをうつことばかりし、朝焼とも曇天ともつかない空模様。朝の紅茶が実にうまい。インスタントラーメンと昨夜の残り飯で朝食をすませる。昨日朝日岳の山頂を踏んだので、今日は山頂をトラバースする道をいくことにした。森林限界付近の樹林帯に登山路があり、しっとりと草木が濡れており、ニツカズボンからそれを感じとれた。白馬岳は雲にかくれて見えない。雪倉岳手前辺りから富山側からの風が、時々強烈に襲ってくる。白馬〜乗鞍岳稜線が眼前にせまってくる。白馬大池が見えるのには驚いた。初めて冬山合宿に参加して以来の再会であったからです。山頂の窪みで強風を避けて中食、雲が激しく移動、すっかり展望から遮断されてしまった。

雪倉ヒナン小屋は倒壊してしまっていた。雨がバラバラしだしたのでヤッケを着る。雲にすっかり遮断され、縦走路が三国境へのアプローチを見つけてくれる。三国境に立ち10年前の冬に梅池から白馬岳をアタックした頃のことが頭に思い出された。コーヒーをわかし中食をとって、白馬山頂にむかう。稜線に雷鳥の親子づれ4〜5匹ビービーと鳴きながら、逃げる様子もない。ヒナ鳥が無事成鳥になることを祈りながら、その場から離れる。

山頂はすっかり雲で遮られていたが、10人前後の人々が一瞬の眺望を期待しながら待っているようであった。私はすぐに山頂を離れ、テント場にむかった。案じていた雨が降りだし、テント場に着くや本降りになり、急ぎテントを張りテントに飛び込み、小止みになるまで紅茶をすすることにした。雨はその後降ったり止んだりの状態。今回3度目のカレー食を作り、早々にシュラフにもぐりこむ。

翌朝視界10メートルだが雨は止んでいた。さあ下山だ。鎚温泉でひと風呂あびることにして縦走路を南下。全く視界がきかず、黒部からの風が顔を濡らす。今回最後の山頂、鎚ガ岳を通過して温泉への道を急ぐ。鎚温泉への下り道は急勾配のため、我30才なる足も少々くたびれかけてきた。振り返ると稜線はなおも雲で被われていた。風は全くなり、雲の切れ目から少しずつ展望が開けてきた。くるまゆり・こばりけそう・大文字草等、高山植物の咲く登山路。リュックを下して一休みするのがなんともいい気持。鎚温泉は山小舎が1軒、その前には満々と湯があふれ出る露天風呂があり、そばに脱衣場と婦人用の温泉小舎がある。当初だれも入浴している人もなく15人前後の登山者が小舎の前で休んでいた。私は入浴を少々ためらったが、勇気を出して入ることにした。眺望はさすが素晴らしく、これでビールでもあれば最高だ。湯は透明であふれる湯はどんどん下の雪溪へと流れる。側を通り下っていく登山者には私を羨しく思っていたにちがいない。30分程湯に入ったり出たりしていると20才前後のハイカーが2〜3人入ってきた。湯上りはやはり非常に気持ちよい。さーて猿倉まで約3時間残っている。なんだか下山するのが面倒な気もする、と言って1晩ここで過すのももったいないし、やっぱり下山することにした。入浴料1人100円はまことに価値のある温泉であった。

参考タイム

- 7/29 手岩6:30・蓮葉温泉8:00~8:25・瀬戸川9:45・白高地沢10:30~
10:45・カモシカ原11:00・朝日岳避難小舎跡15:30・朝日岳18:30
朝日小屋19:00
- 7/30 朝日小屋5:35・雪倉岳10:20~10:40・三国境11:45~12:30・
白馬岳13:10・テント場18:30
- 7/31 テント場5:30・鎚ヶ岳7:00・鎚温泉8:30~9:50・猿倉12:15

以上

例 会 報 告

9 月 8 日 大 杣 池 集 中

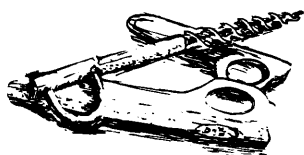
岸本・星野・長島・三宅・野上②・幸内・内藤②・宮本・田中正

台風18号の影響により、朝の集合時からしとしと雨が降っていて、ブツシュ漕ぎにはいやな状態でした。それでも三班に分かれて各パーティ選択したコースへとブツシュの中に入って行きました。雨は強烈に降り、ガスがかかり雷様が時折鳴っていました。

雨にうかれて出てきたヒキガエル(ガマ)が行く先々で見られ、何度も足を止められました。

岸本パーティだけが予定どおりのコースを遂行できただけで、他の2パーティはどこかで沢や方向を間違えて志久峠に出るまで間違いに気がませんでした。中山大杣池に全員集結し、道場へとバスで向かいました。もう一度、今度は沢や方向を間違わないように完走したいと思います。

記・田 中



烏 甲 山 (2037,6m)

三 浦 靖 男

振替休日を利用しての三連休、六甲の山でがまんする手はないとどこかい山はないかと思っていところ、新川氏から烏甲へ行こうとの声がかかる。私はこの山がどこにあり、どんな山か全然知らなかったため、さっそく調べてみると、長野と新潟の県界にあり東に苗場山・北に野沢温泉・南に志賀高原があり、しかもそこにはクライマーを魅了するほどの壁もあるとのこと、さっそく出かけることにするが、結果的には旅情豊かな山旅と、かなりのアルバイトを強いられるという結末に終わった。

北陸線経由で電車で揺られること14時間半、バスに揺られること2時間、秘境秋山郷の入口小赤沢に着く。さらにここより林道を歩くこと6Km 烏甲登山基地の和山温泉に着く。ここで今までのアプローチの疲れと明日への鋭気を養うために温泉に入り、山菜を食べ、そして特効薬で体調を整える。

烏甲に登るための一般ルートは一本しかなく、それは烏甲より南に派生している稜線を末端より

取り付くもので10以上のピークを越えるコースで、そこにはカミソリ岩と呼ばれるナイフエッジ状の箇所や、ハリガネ・ハシゴなどが多く設けられたハードなコースである。別の登路としては、バリエーションルートとして烏甲に突上げている白沢をたどるコースであるが、それはかなりの急勾配でしかも最後のヤブコギもたいしたものである。しかし烏甲に登るには後者の方が時間的にかなり稼ぐことが出来、しかも岩壁と雪溪に囲まれ、岩登りの要素も多分に含んだアルペンのルートにあふれている。我々は宿の主人にこの白沢の状態と取付きを聞くが、白沢はかなり荒れており、また困難とのこと、それに加えて今年に入って沢を登路にとるのは我々が第2登であることも聞かされる。

翌日、昨夜頼んでおいた弁当をもらい6時に宿を出る。この宿から目的の白沢の上部を正面に見ることが出来る。空模様はあまり良くなく、昼まではなんとかもちそうな天気の中を二日酔で固い身のまま林道を歩くこと1時間出合に着く。鉄の堰堤を二つほど過ぎた所が中ズンネに間に挟んだ白沢と赤沢の出合である。対象的な赤い色と白い色をしたこの沢は、どちらかと言えば赤沢のほうが広く、そちらにまちがって入るパーティも、ときどきあるとか。ここよりあまり勾配のない荒れた白沢を進むと40分ぐらいで雪溪に着くことが出来る。ここで沢は二分し、ルートは右側に行くが、宿の主人の話では道を間違えやすいとのことだが、導標がいやになるほどあり、しかも枝沢が多くないのでたいしたことはないように思う。この雪溪は厚さが10mもあろうかと思われるほどで、その横のシムルントを通るものの頭に水滴を落とし、時として「ヒヤッ」とさせられるが天候も太陽が顔を出し、快適に歩くことが出来る。

この沢は全体に雪崩が集中するため想像を絶するものと思われるが、滝はすべて落石によりうめつくされ、その滝はつるつるのままに職人が手を加えたのではないと思われるようなスラブが多く点在している。(そういえば雪溪の左俣はすぐ上の滝が50mぐらいあるが、まさにそのような形の状態であった。この白沢の入口の鉄堰堤も雪崩のため、めちやくちやに壊されてあった。)この雪溪より急に傾斜が増し、滝も多く現われて我々の息使いも荒くなる。1時間くらい歩いて二俣につく。二俣と言っても当然右俣しか行くことが出来ず、左俣は上部が岩壁になっている。おそらくこのあたりが烏甲の壁であろうが、とても登攀する気にはなれない壁で、硬い箇所はせいぜい2・3ピッチ程度のガラ場のようなところである。ここよりいくつかの滝を越えてからイタドリ密生している箇所に入り、前方の赤茶けた壁目差して急勾配に行くが、最奥部まで行かず一つ手前の所に取り付いたため、猛烈なヤブコギをさせられ中ズンネの稜線に出る。しかし道はどこにもなく踏跡もない。苦闘の末最奥部の赤茶けた壁に辿着きここからかすかな踏跡を辿って、なおもヤブコギを続けると、ひょっこり稜線の登山道に出る。まずは一本立てる。ここから頂上まですぐかと

思うとゆりに一ビッチはある。それでもなんとか頑張り通して頂上と下降路の分岐点に着く。11時40分、ここにリュックを置いて駆足で歩くこと10分、そこは烏甲の頂上であった。天気良かったのは朝方だけでヤブコギの頃よりガスが去来し始め、今は回りがガスに包まれて展望はまったくきかず、しかたなしに記念写真だけを撮り早々に先ほどの分岐点まで戻る。ここで昼食を取り出発するころには顔に冷たいものがあたり足早に降りる。この辺の道は山頂より下までほとんど一直線につけられた道が多いためたまったものではない。各自バラバラに歩くと言うより駆け降り、本降りになった雨の中を2時半ひよっこりと林道に降り立つ。ここより屋敷温泉を通り半時間ぐらい歩くと、そこは昨日バスを降りた小赤沢の部落であった。

雨にけむる烏甲はバスに包まれ、はや秋を感じさせるまわりの山々と空気に、私は心地良い疲労感をおぼえ、共に行動した仲間とアルコールにて疲れを癒す。帰路は長野まで昨日と同じで、長野より中央線経由のガラガラの電車に乗り込み翌朝大阪に降り立つ。

パーティー：新川利夫・川本 勉・野上 博・三浦靖男

期 間：昭和49年9月13日～同年9月15日



木曾駒ヶ岳滑川集中

内 藤 正 司

9月21日(土) 大阪9:50 くらよんにて出発する。参加者11名、立派だ。睡眠時間の無いのはいつもの事だ。9月22日4時木曾福島駅に着く。曇っていて今でも雨が降りそうだ。タクシーを2台チャーターする。ここで一つの失敗があった。駒の二合目と言ったので運転手は福島駅登山口の二合目に行ってしまう。後発のタクシーは上松二合目に着くとだれもいない。幸いの事に同じ会社のタクシーだったので、無線連絡をすると、気が付きこちらに向っているとの事、安心して小屋にて待つ。

全員そろった頃から雨が降り出し、時折強く降り、雨の上がるのを待つことにした。小屋のおばさんはお面白い人で、小屋中映画のポスターそれも仁夾映画のポスター皆たのしげにみていた。7時頃雨も小降に成り出発する。大崩谷上部キバ岩から稜線にかけて白いものが被っているではないか。敬神小屋より沢への道へと進む。大きな岩がゴロゴロした本谷をどんどん進む。三ノ沢出合10時20分。この辺から沢も少し狭くなり、いよいよという感じだ。奥三ノ沢パーティー(内藤

保・三浦・星野)と別れる。しばらく行くと少し暗い感じの前岳沢出合である。そこで明日の再会を約束し、前岳沢パーティー(岸本・梅原・宮本・植原・長島)と別れる。本岳沢までは谷も狭くなり急になってくる。宝剣沢・本岳沢との出合13時。本岳沢パーティー(内藤正・立岡・幸内)各パーティー遡行を楽しみ、翌23日全員無事玉及窪小屋に集結、上松道を急ぎ足で下山する。

前 岳 沢

長 島 安 代

9月22日 岸本・梅原・宮本・植原・長島

13:00 前岳沢に入る。朝方からばらついていた雨のため、水量がふえているようだ。F₁は高さはないが水量が多くコケがついていてすべりやすい。慎重に右岸を登るがそれでもすべる。

20分かかっている。F₂は右岸を高巻きして滝の上に出る。左岸に渡ってすぐに続くF₃・F₄を登る。左前方のゴルジュにF₅が見える。左岸を大きく巻いて草の中を登るが、足場が悪く踏む下から土がくずれていく。草につかまりながらF₆の上におりてくる。

15:00 奥三ノ沢と交信する。最後のF₇は幅の広い滝で、滑らかな大きな一枚岩の上まで行き、そこからザイルを使い、ハーケンが1本打ってあるが、大きな岩がかぶさっているので登りにくい。上の方は石がもろいので要注意。水の音で声もとどきにくく、全員上がるのに40分かかった。滝はもう終わり、50分ほどガレ場を行くと二俣に出る。右側の沢を進み、18:00 水場の最後のところでビバーク地をさがす。たき火で冷えた体をあたためた後、星を見ながらシユラフにもぐりこむ。

前日とうってかわって絶好の天気で、気持ちよく目を覚ます。出発してガレ場を30分、上松道に出会う。荷物を置いて9合目玉ノ窪まで快適な尾根歩きを楽しむ。ここで本岳沢のパーティーと合流。

道を歩いているだけでは味わえない山の楽しさを、この沢登りで充分に満喫することができた。

本 岳 沢

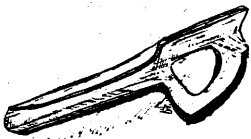
(9 月 22 日)

幸 内 義 孝

L. 内藤₂・立岡・幸内

9月22日 小雨の中、滑川本谷を詰めた。途中で奥三ノ沢、前岳沢の人達と別れて小1時間で本岳沢出合についた。右の沢が宝剣沢、左の沢が本岳沢だという。見た感じでは左岸を登るのだろうと思ったが、違っていた。不安でいっぱいの感じだった。トツブはルートをよく見ながら登っていった。合図は手まねと笛で行った。確保OKの笛とともにTがブルージックで登る。次は僕の番だ。ザイルはあるが見えないし、声も聞こえにくい。練習の時と条件が異なっていた。5メートル程登って下を見た。そんなに恐いと思わなかったのに何故か足がフルエタ！でも何とかトツブの所までいけて一安心。その後は草付まで何なく行け、F₁通過。間の沢の所で前方に二段の滝があり、左岸を高捲き、そしてアンザイレンしてトラバース、河原に降り立った。

その後は快適であった。だんだん上流へ行くにしたがって水量も少なくなり、水はボツと消えた。前方には岩峰がそびえ立ってたいへんきれかった。水を吸んでガレ場を1時間30分位登る。途中暗くなったが、月がとても美しく僕達の足元を照らしてくれた。山小屋のあかりが見えたとたんに足の痛さと眠むさを感じた。



冬山偵察・木曽駒ヶ岳～宝剣岳～空木岳

参加者／幸内・田中

10月25日(金)

田 中 正 裕

前日まで周期的に変っていた秋空は、山行の数日前から大きな高気圧の通過により連日晴れていた。秋山は初めてで本当に見る紅葉のきれいな山と静かな山を期待して、21時04分発のちくま1号で出発、3時ちように木曽福島に着く。列車から降りると、すみきった空気と寒気に思わずジャンパーを着る。駅にはすでに数パーティーいた。

タクシーに乗り、上松2合目まで行きアプローチを稼ぐ。タクシーから降り真暗らな道を歩くと夜空には満天の星が輪舞を見せているのに気がつく。

4時にアルプス山荘前の水銀灯の下でコーヒーをわかし一息つく。列車の中で寝むれなかった分

をあたりが明るくなるまで少し寝る、少しのつもりがシユラフに入った心地良さについて寝過ごしてしまう。

10月26日(土)

幸内さんがモコツと起き上がり僕を揺り起こした。まだ寝むたく、上下の脛がくっついてとれない。目がしょぼしょぼする。6時である。明るくなった中央アルプスを見る。10月の下旬ともなると紅葉が進み過ぎているのか、赤い葉ではなくほほ黄である。その黄色づいた前衛の山々の間から宝剣岳であろうか鋭く上がった岩稜を天にいくつもついているのが見える。

アルプス山荘前を6時30分出発。すこし行くと大崩谷の川を渡り滑川に入る。山路にはそうとうな量の落ち葉が落ち、土が見えない程である。黄色く紅葉した山々の間を縫って敬神の小屋につく6時50分である。ここから上松道の本格的な登りである。金剛水まで水がないので水筒に水を詰める。敬神ノ小屋には、ランプがいまにも消えそうについていた。女の人がひとり泊っていた。7時10分出発、落葉の上をふみ、落葉を跳りまるでじゆうたんの上を歩いている様だ。金懸小屋へ8時35分に着く、5合目である木曾谷を隔てて霊峰御岳が眼前に快晴の秋空の中にくっきりと巨峰を見せ、広い裾野を引いている。金懸小屋は板で作られた割合大きな小屋である。すこし行くと金剛水がある。金剛水はセメントの枠に貯められて水量豊富である。行動食をとり金剛水を飲む。金剛水を9時に出る。いいペースで10時に天の岩戸に着く、10時である、1本立てる。雲一つない秋日よりに展望がすばらしい、6合目である。北側には枯木が多く灰色に崩れた様な尾根がある。南にはダークグリーンの深い滑川谷をはさんで三沢岳が青黒く見える。ここから三沢岳のピークを見ると、はるかにピークは上の方である。13時位には木曾駒のピークに着くだろうと思う。冬山偵察を含む秋山なので稜線を厳守しなければならないのだが、日程が制限されている以上、また眼前に見える道の誘惑の為に木曾前岳をトラバースしてしまう。

玉及窪小屋に12時15分に着く。上松道では2人の女性に出合っただけであったが、玉及窪小屋には福島道から登ってきたと思われる数パーティーの登山者に合い、一本立てる。

北西から北にかけて乗鞍岳・笠ヶ岳・焼岳、奥には穂高・槍ヶ岳、槍には雪が白く輝きを見せ、穂先を天についでいた。そして常念その奥に白く見えるのは後立山連峰であろうか。駒ヶ岳の9合目あたりには小さな岩峰が散立している。駒ヶ岳に13時05分に着く。山頂は広くなめらかなピークである。あたりを見回すと、中央アルプスと名付けられているだけあって、北には北アルプス南東には南アルプスその南アルプス連峰の稜線から富士山が頭を出している。そして東には八ヶ岳甲斐駒のフランケがよく見える。西には御岳そのはるか遠方には白山が見えている。

メタでオボスポーツを解かして飲む。昼食を取りながら南に延びる尾根に目がいく。宝剣の岩稜

そして最終目的地の空木岳がはるか遠方に見えた。今日は宝剣を越し、出来るだけ行き幕営しようと思っていた。

駒ヶ岳から宮田小屋に降りると小屋の前に2張のテントが張られていた。丘のような中岳を越えると宝剣宮田小屋である。そこから見ると宝剣沢のつきあがて来た所に天狗岩があった。まさしく天狗の横顔である。稜線を通して宝剣岳の登りにかかる。15時15分 ピークに立った。ピークは2人乗れる位の狭い岩である。写真を撮り15時35分に出発。

千畳敷側と宝剣沢側はスバツと切れ落ちている。冬期には氷やエビのシツボ等で岩稜を埋めるので通過するのに極力注意を要求されるだろうと思う。岩稜を越えて極楽平に出るとなだらかな峰に出る。日は大分西に落ちてきている。サギダル頭の岩稜を行くところ木曽谷からの冷たい風に吹きつけられながら、太陽はわき出した雲の中に沈んでいく。伊奈川の枝の谷は暗い紫に見え、風がだんだん強くなってきた。そろそろ幕営場所を捜そうと務めたが、適当な場所がなく濁沢大峰を越え、檜尾岳に17時30分に着いた時には真暗で南東の限下には駒ヶ根市の町の光が強い気流の流れで大きくまばたきをしている。時間切れで檜尾岳に幕営を余儀なくされた。練習を兼ねて、檜尾岳ピークに設営をする。吊テンなので飛ばされないようにピークの標識にステーを結びつけ、吊テンを固定する。星がまばたき西の空は厚い雲が赤く染り夕焼けがきれいである。

ワイ談、歌等をした後、明日の天気を祈り10時にシュラフに入る。疲れているのかすぐに寝つく。

10月27日(日)

吊テンのばたばたという音とパチパチという音で目を覚ます。3時である。シュラフから起きて懐中電燈を照らすと吊テンが風で曲り、風圧でテント地から雨がしぶきをあげて吹き込んで来る。毛の下着に着替え、雨に備えてカツパを着てフライを付けに出る。

登山前のアルプス山荘で聞いた天気予報や夕焼け、星空をあてにして今日は晴れだと思いこみ、空木岳から池山尾根を通り下山出来ると計算していたが、とうてい行けそうでない。残念である！5時、風雨は増すばかりで、檜尾尾根を下山する。明るくなると撤収ときめる、みぞれが降り始める。6時30分撤収。檜尾尾根を降りる。檜尾小屋は屋根が壊れていて石が積まれた壁が残っている。その下のリツパな小屋はカギがかかっていて使用できない。

檜尾尾根は急でグングン高度を落していく。9時20分中腹あたりで1本立てる。小雨になりガスが少し晴れてきた。ふり向くと紅葉の中に千畳敷カールが見える。しばらくするとカールの上にとんより曇った空に宝剣が空をついている。ドライブウエーに着くと、ガスが昇り、きれいな紅葉の中に木曽側より赤みが多いのに気がつく。

初めての山行

(片山文子)

夕暮れ時の山は 悲し
歩き疲れて 腰をおろした

真前で

太陽が 没しようとしている

影絵のように 木が写し出されて
キラキラ光る

あたりが 急にシーンとなつて

緑の山が 灰色のベールをかぶる

私が この世に 一人ぼっちで残される
様な気になつて

ああ こんな日没をむかえるのなら
汗をかきかき 来るんじゃないか
…

多くを語りかけてくれた木々は もう
口をつぐみ

眠りに入った山は

うすめで 私を見おろすだけ

足に快くはじいた石ころさえ

ただの土のかたまりに もどってしまった

とぼとぼ 歩く

ふと ふりかえったとき

綿の様な ススキ が 野原一面にあつて

じんわり 私の背中を あっためてくれた

(10/6

菊水ゝ宝塚 強歩)

会 員 動 静

おめでた

土居 健次さん	長女「ゆき」ちゃん誕生	8月 5 日生
武田 禎さん	長男「健太郎」君誕生	9月 17日生
内藤保一さん	「千保」ちゃん誕生	10月 17日生

ご 結 婚

野上哲男君 去る11月4日、京子さんとめでたくゴールイン。知る人ぞ知る、剣岳が
取り持つ縁だそうです。おめでとう。

編 集 後 記

但島の山々からもう雪のたより。先日は六甲山にも初雪が降った。ひらひらと舞いおりては消える初冬の雪は、なんとももの哀しいメルヘンを想い起こさせてくれるものだ。忘れかけていた白い風景が、深い意識の底から限らない郷愁をたずさえて舞い昇ってくる。そんなものだったのかもしれない……雪山への憧れのはじめとは——。

—— T.

本号は、新人諸君はじめ多くの方々から原稿をいただきまして、盛りだくさんな月報をお届けすることができました。なにはともあれ、地道ながら活発に動いている証拠ですので喜ばしい傾向といえるでしょう。

以下原稿提出の留意点を列記しておきます。

- 20×20 原稿用紙に楷書で横書き
- 書き終えたら、もう一度読み返してみてください。（誤字・誤用・句読点、まとめられているか等）

—— M.